ロッド空港乱射事件にふまえた

中東におけるイスラエルの立場

公開書簡／かつてイスラエル、特にキブツを訪問、労働・学習したことのあるすべての友人たちにあてて

■アキバ・エゲル（アジア・アフリカ研究所所長）／訳・百瀬直彦

OPEN LETTER TO ALL FRIENDS IN JAPAN WHO HAVE VISITED, WORKED, AND STUDIED IN ISRAEL, ESPECIALLY IN THE KIBBUTZ.

■ AKIVA EGER

去る五月のロッド空港虐殺事件を論じた、日本協同体協会制作部の座談会記事、「テロと非暴力をめぐって」（月刊キブツ七月号）の英訳を読みました。座談会への参加者が誰か知っている私としては、暴力行使一般、特に今回の事件における暴力に対するかれらの意見、基本的態度を知り、理解しようとするとき、深く気にかかるものがあることを告白せねばなりません。

座談会に表われたいくつかの論点に入るまえに、二つのことをはっきりさせておきたいと思います。

(1) イスラエルの人々はロッド空港での恐るべき犯罪的行動が、日本の人々を代表する感じ方や意見と関係あるなどとは断じて思っていません。イスラエルはこの行動を、破壊へとかりたてられ、人類の未来への明らかな考察をまったく欠いた、深く混乱、困惑させられた精神の表現とみています。日本の〝赤軍〟そしてそのロボット的追随者たちは〝狂気の突出部〟、日本の体制のある部分、そして人類のある部分の恐るべきやまいの徴候であるとみなされてきたし、今もやはりそう思われています。

(2) 三人の日本人が、非軍事的な目標に個人テロをもっぱらにする比較的小さな、代表的でない組織によって立てられた計画の遂行者であったこと、そしてかれらが盲目的に命令に従って無差別に、まったく罪のない人々——そのうちの多くはイスラエル人でもユダヤ人でもない——を殺害したことは、日本のあらゆる分野の人々、それに日本政府の確固とした高貴な反応をひきおこしました。こうした反応がなかったならば、日本人の評価とイメージに対して修正しえない損害がおよぼされたかもしれません。

さて、座談会記事に対して——

(1) わが国や世界におけるよりよい社会——もっと人間性、社会・経済的正義のある、人間による人間の、国による国の、民族の間の搾取、宗教、信条、性、年令による差別のない社会——人類と国民の進歩のためのこの闘争には、より若い世代の精神的、倫理的な力が要求されています。

我々は帝国主義、植民地主義、資本主義のあらゆる表出と闘います。しかし、より健康な社会の建設のために我々は各自の持てる力をささげようと思っています。

この目的のために、まず我々は対立したいと思う権力や情況が何ものであるか明確にしなくてはなりません。我々は何ものが各国、また国際的に進歩的な勢力であるか、つまり、人間の自由、表現、集会、移民の自由、個人また社会集団のあらゆる経済・社会・教育的進歩のために闘争し、成果をあげているか、正確に分析しなくてはなりません。批判的な視野に立って世界各地を見てみると、どこで自由があるか、どこで束縛があるか、どこで人々は自分の運命を決め、どこで支配され、圧迫され、しいたげられ、殺されているか見出すのは、それほどむずかしいことではないでしょう。

(2) イスラエルとアラブ諸国との抗争はすべての側に多くの悲惨と人間的苦悩をもたらす一大悲劇です。第一次大戦時代から正当にも独立と自己表現をめざしたアラブ独立運動によって、約八〇〇万平方キロの良質の耕土、水源をもつ土地に、約一億人の人口を持つ一七の独立国の設立をみました。

ローマ帝国の勢力によって母国を追われ、世界中に離散させられたユダヤ人は、何世紀にもわたって流浪から、差別されることから、はずかしめから、追放と時々の虐殺からのがれようとして、パレスチナの地とイスラエルの民の復興をめざして現代的に組織し、着実に継続的な開拓の努力によって近隣各国の中にユダヤ人のノーマルな生活形態を確立し、一九四七年にこの人間的権利の国際的承認を得、そして自分たち自身の国を造ることについて国連の圧倒的多数の裁定を得ました。一九四八年、イスラエル在住のアラブ人には何らの危害も加えられませんでした。（原注・〝ディル・ヤシン〟事件は戦時下において国民的運動とその規律に従わない、意見を異にするグループによって犯されたもので、そのグループは激しく政府ならびにイスラエルの代表的機関から拒絶された。）他に国民的郷土を持たないために、この地に歴史的な郷愁と責任を感じる唯一の民、ユダヤ人によって買収されたこの地の全般的な発展の結果、そこに住んでいたアラブ人は経済的に、その他あらゆる面にわたって多大な恩恵を受けてきました。

アラブ隣邦諸国はイスラエル誕生のうぶ声と同時に、全面戦争をしかけ、その後も二度にわたって経済的圧迫、封鎖、軍事手段をもって、完全攻略しようとはかりました。しかし、はるかに少量の武器しか持たないが、生死をかけ、イスラエルの民、イスラエル国家——ユダヤ人にとって唯一の正常な生活——の存続をかけて戦う少数人民にそのたび敗走させられました。

(3) これらの敗戦はアラブ側を深くはずかしめることになりました。というのはかれらは国民的プライドを深く傷つけられたからです。これは二つの国民運動の抗争であって、決して進歩的なアラブ側と反動的なユダヤ人、あるいはアラブ社会主義対イスラエル資本主義、植民地主義、帝国主義の先峰の抗争ではない。これがちがった、また現にちがう性質の抗争であることは容易に理解できよう。どこに進歩——社会主義実現、現代的そして社会的に進んだ民主主義政府、地方・地域自治——があり、どこで絶えざる努力が社会・経済的正義のより高い実現のために払われているか。そして、どこで軍事議会、反動的、封

建的、ファシスト、そしてネオ・ファシスト的勢力がぎゅうじり、言論・集会・運動の自由を許さずにいるか。それは客観的な観察者、誠実な民主主義者、社会主義者にとっては明白なことです。

(4) イスラエル国民はアラブ人を憎んでおらず、決してかれらに害をおよぼそうとは思っていません。イスラエル国民はアラブ人を国外に追い出したわけでもなく、強制して土地や所有物を売らせたわけでもありません。アラブ難民は一九四八年にかれらの指導者の助言に従ってアラブ、特にイギリス指導下のトランスヨルダン・アラブ軍団の短時日の勝利のあとの帰還、すべてのユダヤ人の所有物を剝奪し、ユダヤ人を海に追い落とすことを信じて国から逃げ出したものです。その後の何回かにわたる難民の群はアラブの侵略と全面破壊のおどしによってもたらされた戦闘行為の結果です。

(5) アラブ諸国（イラク、イェーメン、シリア、レバノン、エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ）から七〇万人以上にのぼるユダヤ人が、ほとんどの場合全財産没収のあと追放されました。どんな最終的な和平解決でも、ほぼ同数である双方の難民問題が両方の側から提示されねばならないでしょう。同じことが遺留、没収、差押え財産についてもいえます。ただユダヤ人のアラブ領土に残した資産の方がイスラエルに残されたアラブ人の資産よりはるかに高価であるということはあります。イスラエル人管理官は紛争の解決の日のために、すべての細部にわたって資産を記録してあります。

(6) アラブ諸国からの七〇万ユダヤ難民はイスラエル人から同胞として迎えられ、経済・社会・文化的な同化、吸収と国語のヘブライ語を教えるために多大の努力が払われました。

アラブ難民は、同じ国語を話し、伝統、習慣を同じくし、しばしばアラブ各国民の親戚でしたが、二四年間難民キャンプの中に、多くの場合働くことも許されず、市民権もなく、イスラエルに対する切り札として国連の予算でとどめおかれました。これら難民キャンプの中で憎悪が養われ、テロ組織が確立されました。その中から侵入者、ゲリラ集団がイスラエル国民のみかアラブ人までもの生命、資産の破壊をもたらしました。ゲリラに協力しないアラブ人は殺され、その数はユダヤ人でテロに倒れた人々を大きく上回っています。

(7) 若い人々の深い幻滅と絶望の世界的傾向、そして飽和した、しばしば無意味な社会の〝体制〟に対しての必死の抗議の試みとは日本、アメリカ、ドイツなどでもアラブ諸国と同様破壊的行動をひきおこしました。いったい、これらの絶望した若者たちの心の中によりよい社会、正義の社会への思考、理想、展望が本当にあるのだろうか。悩み多く、狂った世界で、むしろかれらは心の平衡を失うことの方が多くはなかったか。かれらは流れに逆らって、明確なゴールに向かって泳いでいるのか。今ある社会にとってかわる新しい社会を建設しているのか。あまりにもしばしばかれらは、最も反動的、ファッショ的意団の集団の犠牲者、あるいは道具になっていはしないか。

(8) 世界での平和と進歩を望む真剣な人はだれでも心から、またすべての行動において、紛争の当事者同士の交渉をもたらすあらゆる努力を支持しなければならないと信じます。今世界のもっと厳しい紛争の渦中でも行なわれているようにです。これがイスラエルの望むすべてです。前提条件なしにテーブルにつき、隣邦アラブ諸国をはずかしめることなしに話し合い、この地域に住むすべての人々の福利の進展のために最終的な地域の平和をうちたてるということを最後の目標として、どんな問題も開放的に論じあう用意があるのです。

(9) もしも我々がキブツの理念——階級のない社会、同胞愛、相互扶助、相互責任に基礎をおく社会、人間と労働の尊厳の社会——を信ずるならば、ユダヤ人とアラブ人の間の直接の対話を徐々に形成していくすべての努力を支持せねばなりません。この対話と、共に生活することはイスラエル領土内においてはずっと前からはじまっていたし、イスラエルの行政区画内においては行なわれつづけています。これは恵まれない第三世界の国々とのつながりとともに、両者の間に橋をかけ、最終的には外交努力に劣らず和平に導くでしょうし、そのための固い礎石になるでしょう。

(10) もしも日本の若い友人たち、特にキブツで共に働いたものたちがこの方向に沿って貢献しようと思うならば、新しい社会、人間にとってより良い世界の進歩的で考え深い建設者として、建設的、積極的な課題を遂行することになるでしょう。

例の制作部座談会で言われたいくつかの意見と推測は、この線に沿ったものとは思えず、むしろネオ・ファシズム、全体主義的な暴力に加担するもののように思えるのです。このゆえに、いくつかの表現が私ほか多くの友人たちにショックを与えたのでした。

あなた方の何人かは誠実に、一心にこの悩み多い世界の中に新しい方向を見い出そうと努めていることを知っています。しかし、決してバランスを失い、現実をゆがめてはなりません。もしも現実を変えようと思ったら、我々は他人の利害や〝イデオロギー〟にあてはめるために現実をねつ造するのではなく、ありのままに知らなければなりません。

どうか私の卒直、正直な批評を良き友への所見として、悲劇的で複雑な問題を考える際により客観的な視野に到達するための考慮に加えて下さい。

来年の五月、この研究所卒業生のための短期セミナーで会えるのを楽しみにしています。もし必要とあらば、この論議をつづける用意があります。

友愛をこめて

アキバ・エゲル

月刊 しゃろーむ

編集と発行 キブツ懇話会 近江のぼる

■毎月15日発行
■定価50円（送料共）／年間600円
■秋田市土崎港北三丁目10－10
〃 ■振替口座・秋田 5089